

薬学部附属創薬研究センター ～機器分析施設 20年のあゆみ～

○田中栄緒、入口利之、西山麻砂美

熊本大学 薬学部附属創薬研究センター 機器分析施設

薬学部附属創薬研究センター機器分析施設は2011年に学内再編により名称を変更し、現在に至っているが、その歴史は古く60年前にさかのぼり1954年に薬学部有機微量分析室が設置されたのが始まりである。当時は元素分析装置が2台設置され、技官が測定を行っていた。1957年に薬学部の共同利用施設となり、ガスクロマトグラフィー、赤外分光光度計、紫外可視自記分光光度計などの機器が設置され、1966年に60MHzの核磁気共鳴装置、二重集束質量分析装置が導入された頃から、技官による依頼測定の業務が本格的にスタートした。その後、薬学部の共同利用施設からその役割が大きく変化したのが、1991年に省令により新たに学内共同利用施設として設置された機器分析センターの発足である。共同で利用可能な大型分析機器を集中管理し、機器利用の効率化及び経済化を図るとともに、分析技術の開発研究を行い、全学の教員、学生の研究及び教育に寄与することを目的とし、センター長（併任）、専任教員として助教授1名、助手1名、技術職員3名、計6名の体制で活動を開始した。1994年には薬学部敷地内に機器分析センター棟、地上4階、延べ床面積1,180m²（4階フロアは薬学部学生実習室）が完成し、大型機器も徐々に整備された。この頃より、センター職員として機器の管理・運営に携わるようになって約20年間、大型機器の高性能化、分析技術の高度化は著しく進歩し、今では、核磁気共鳴装置5台、質量分析装置6台、X線解析装置3台など、最先端の大型機器から汎用の小型機器まで合わせて約80台の機器が本施設に設置されている。しかし、大学を取り巻く環境も大きく変化し、予算の獲得や人員の削減、組織化など難しい問題も多くある。現在は専任教員が不在の中、創薬研究センター長（併任）、技術職員3名で教育・研究支援、技術指導、情報提供に関する業務を行っているが、今回は本施設の紹介も含め、これまでの活動及び今後の課題について発表する予定である。

【沿革】

- 1954年 薬学部有機微量分析室を設置
- 1957年 薬学部共同利用施設となる
- 1962年 有機微量分析室より中央実験室と名称を変更
- 1971年 中央実験室より分析センターと名称を変更
- 1980年 他学部からの依頼試料の測定開始
- 1991年 熊本大学機器分析センターを学内共同利用施設として設置
- 1994年 熊本大学機器分析センター棟竣工
- 2003年 学内再編により生命資源研究・支援センター機器分析施設と名称を変更
- 2011年 学内再編により薬学部附属創薬研究センター機器分析施設と名称を変更

